

「事業場における労働者の健康保持増進のための指針」新旧対照表

改正後	改正後
<p>事業場における労働者の健康保持増進のための指針</p> <p>昭和63年 9 月 1 日 健康保持増進のための指針公示第 1 号 改正 平成 9 年 2 月 3 日 健康保持増進のための指針公示第 2 号 改正 平成19年11月30日 健康保持増進のための指針公示第 4 号 改正 平成27年11月30日 健康保持増進のための指針公示第 5 号 改正 令和 2 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第 7 号 改正 令和 3 年 2 月 8 日 健康保持増進のための指針公示第 8 号 改正 令和 3 年12月28日 健康保持増進のための指針公示第 9 号 改正 令和 4 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第10号 改正 令和 5 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第11号 改正 令和 8 年 2 月10日 健康保持増進のための指針公示第12号</p> <p>1 (略)</p> <p>2 健康保持増進対策の基本的考え方</p> <p>近年、生活習慣病予備群に対する生活習慣への介入効果についての科学的根拠が国際的に蓄積され、生活習慣病予備群に対する効果的な介入プログラムが開発されてきた。さらに、メタボリックシンドロームの診断基準が示され、内臓脂肪の蓄積に着目した保健指導の重要性が明らかになっている。また、健康管理やメンタルヘルスケア等心身両面にわたる健康指導技術の開発も進み、多くの労働者を対象とした健康の保持増進活動が行えるようになってきた。</p> <p>また、労働者の健康の保持増進には、労働者が自主的、自発的に取り組むことが重要である。しかし、労働者の働く職場には労働者自身の力だけでは取り除くことができない疾病増悪要因、ストレス要因等が存在しているため、労働者の健康を保持増進していくためには、労働者の自助努力に</p>	<p>事業場における労働者の健康保持増進のための指針</p> <p>昭和63年 9 月 1 日 健康保持増進のための指針公示第 1 号 改正 平成 9 年 2 月 3 日 健康保持増進のための指針公示第 2 号 改正 平成19年11月30日 健康保持増進のための指針公示第 4 号 改正 平成27年11月30日 健康保持増進のための指針公示第 5 号 改正 令和 2 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第 7 号 改正 令和 3 年 2 月 8 日 健康保持増進のための指針公示第 8 号 改正 令和 3 年12月28日 健康保持増進のための指針公示第 9 号 改正 令和 4 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第10号 改正 令和 5 年 3 月31日 健康保持増進のための指針公示第11号</p> <p>1 (略)</p> <p>2 健康保持増進対策の基本的考え方</p> <p>近年、生活習慣病予備群に対する生活習慣への介入効果についての科学的根拠が国際的に蓄積され、生活習慣病予備群に対する効果的な介入プログラムが開発されてきた。さらに、メタボリックシンドロームの診断基準が示され、内臓脂肪の蓄積に着目した保健指導の重要性が明らかになっている。また、健康管理やメンタルヘルスケア等心身両面にわたる健康指導技術の開発も進み、多くの労働者を対象とした健康の保持増進活動が行えるようになってきた。</p> <p>また、労働者の健康の保持増進には、労働者が自主的、自発的に取り組むことが重要である。しかし、労働者の働く職場には労働者自身の力だけでは取り除くことができない疾病増悪要因、ストレス要因等が存在しているため、労働者の健康を保持増進していくためには、労働者の自助努力に</p>

加えて、事業者の行う健康管理の積極的推進が必要である。その健康管理も単に健康障害を防止するという観点のみならず、更に一歩進んで、労働生活の全期間を通じて継続的かつ計画的に心身両面にわたる積極的な健康保持増進を目指したものでなければならず、生活習慣病の発症や重症化の予防のために保健事業を実施している医療保険者と連携したコラボヘルスの推進に積極的に取り組んでいく必要がある。

労働者の健康の保持増進のための具体的措置としては、運動指導、メンタルヘルスケア、栄養指導、口腔保健指導、保健指導等があり、各事業場の実態に即して措置を実施していくことが必要である。

さらに、事業者は、健康保持増進対策を推進するに当たって、次の事項に留意することが必要である。

①・② （略）

③ 労働者の高齢化を見据えた取組

労働者が高齢期を迎えても健康に働き続けるためには、心身両面の総合的な健康が維持されていることが必要であり、若年期からの運動の習慣化や、高齢労働者を対象とした身体機能の維持向上のための取組等を通じて、加齢とともに筋力や認知機能等の心身の活力が低下するフレイルやロコモティブシンドロームの予防に取り組むことが重要である。健康保持増進措置を検討するに当たっては、このような視点を盛り込むことが望ましい。

また、加齢に伴う筋力や認知機能等の低下は転倒等の労働災害リスクにつながることから、健康状況の継続的な把握のもと、高年齢者の労働災害防止のための指針（令和8年2月10日高年齢者の労働災害防止のための指針公示第1号）に基づき対応することが重要である。

3～6 （略）

加えて、事業者の行う健康管理の積極的推進が必要である。その健康管理も単に健康障害を防止するという観点のみならず、更に一歩進んで、労働生活の全期間を通じて継続的かつ計画的に心身両面にわたる積極的な健康保持増進を目指したものでなければならず、生活習慣病の発症や重症化の予防のために保健事業を実施している医療保険者と連携したコラボヘルスの推進に積極的に取り組んでいく必要がある。

労働者の健康の保持増進のための具体的措置としては、運動指導、メンタルヘルスケア、栄養指導、口腔保健指導、保健指導等があり、各事業場の実態に即して措置を実施していくことが必要である。

さらに、事業者は、健康保持増進対策を推進するに当たって、次の事項に留意することが必要である。

①・② （略）

③ 労働者の高齢化を見据えた取組

労働者が高齢期を迎えても健康に働き続けるためには、心身両面の総合的な健康が維持されていることが必要であり、若年期からの運動の習慣化や、高齢労働者を対象とした身体機能の維持向上のための取組等を通じて、加齢とともに筋力や認知機能等の心身の活力が低下するフレイルやロコモティブシンドロームの予防に取り組むことが重要である。健康保持増進措置を検討するに当たっては、このような視点を盛り込むことが望ましい。

また、加齢に伴う筋力や認知機能等の低下は転倒等の労働災害リスクにつながることから、健康状況の継続的な把握のもと、高年齢労働者の安全と健康確保のためのガイドライン（エイジフレンドリーガイドライン）（令和2年3月16日付け基安発 0316 第1号）に基づき対応することが重要である。

3～6 （略）